

家庭からふりかえる人権

話せてよかった

解説書

はじめに

人がそれぞれに持っている価値観の違いを認めて、相手を大切に思うことは、「人権」の基本的な考え方です。そして「人権」は日常の何気ない人と人との関係性の中にもあります。普段そのことを当たり前のように理解しているつもりでも、夫婦や親子のような近く親しい関係性においては、相手を、そして自分自身を、一人の人間として尊重する意識がおろそかになってしまふことがあります。

本作では、日常の中の思い込みによって生じる問題を描き、相互理解のためのコミュニケーションによって、その問題と向き合うことを提案します。家庭の人間関係は、私たちの人権意識を育む基盤です。そこからふりかえることで、組織や社会における意識も見つめ直すことができるのではないのでしょうか。自分の中にある思い込みに気付き、自分も相手も尊重する人間関係を築くために、職場や家庭内で「人権」について話し合うきっかけとしてお役立てください。

目次

【登場人物一覧】	・・・ 3
【第1章『手伝うんじゃないかと一緒に』～性的役割分担意識に気付く～】	
■ 主な場面とセリフ	・・・ 4
■ ワークシート	・・・ 5
■ 考え方のポイント／キーワード	・・・ 6～7
【第2章『その人自身と向き合う』～偏見にとらわれない～】	
■ 主な場面とセリフ	・・・ 8
■ ワークシート	・・・ 9
■ 考え方のポイント／キーワード	・・・ 10～11
■ コラム	・・・ 12～13
【第3章『話せてよかった』～家族だからこそ確かめ合う～】	
■ 主な場面とセリフ	・・・ 14
■ ワークシート	・・・ 15
■ 考え方のポイント	・・・ 16～18

登場人物一覧



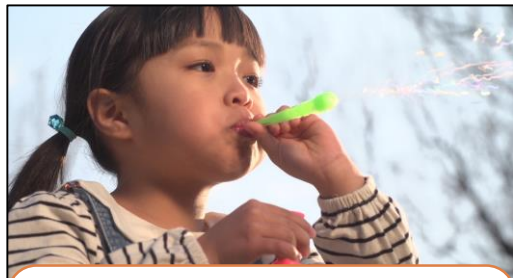
小林 ミサキ (36)

会計事務所社員。自治会では監査を担当。



小林 サトシ (42)

ミサキの夫。飲料メーカー勤務。



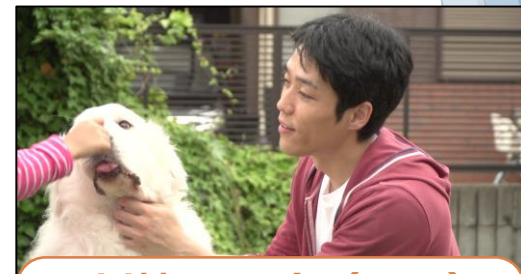
小林 カナ (5)

ミサキとサトシの娘。保育園児。



川端 ハナエ (66)

小林家の近所の住人。
自治会の会計担当。



川端 リョウ (36)

ハナエの息子。
3年前に会社を退職。

■ 主な場面とセリフ

以下のやり取りやセリフについて、あなたはどのように考えますか？

第1章 『手伝うんじゃないくて一緒に』

～性的役割分担意識に気付く～

【ミサキとサトシの会話】

サトシ「なんでさ、そんなに全部ちゃんとやんなきゃなんないの？ 別にいいじゃん、ちょっとくらい・・・」

× × ×

【サトシと課長の会話】

サトシ「俺だってちゃんと手伝ってるんですけどね。感謝されるどころかですよ、怒られるんですよ」

課長「わかる。感情的になられても困るんだよな」

× × ×

【ミサキと同僚の会話】

ミサキ「俺に任せてっていうけどさ、ぜんぶやってんのあたしなわけ。言ってもすぐ忘れるし」

同僚「わかるわ、わかる、わかる。そのくせ自分がやってるっていう態度がムカつくんだよ」

× × ×

【サトシとハナエの会話】

ハナエ「手伝うって思ってるってことは、自分の仕事だと思ってないってこと。

ミサキさんは、手伝って欲しいんじゃないくて、一緒に考えて欲しいんじゃない？」

サトシ「・・・」

× × ×

【サトシのモノローグ】

サトシ「家事も子育てもやって、いい夫のつもりでいた。俺は十分手伝ってるって・・・。

でも、そもそも家のことは妻がやるのが“普通”って思い込んでたのかもな・・・」



Q1. ミサキとサトシは、パートナーのどんなところに不満を抱いていると思いますか。

それぞれの立場になって考えてみてください。

Q2. 「家のことは妻がやる」。このような性的役割分担意識が表れた言動には、他にどのようなものがあるでしょうか。

Q3. 相手との意識のズレを感じる時、自分も相手も尊重しながらそれを埋めるためには、どのようなコミュニケーションがあればよいと考えますか。

■ 考え方のポイント

第1章 『手伝うんじゃなくて一緒に』

～性的役割分担意識に気付く～

性的役割分担の固定観念・思い込みへの気付き

「男は仕事、女は家事・育児」という「性的役割分担意識」は、日本では1960年代以降の高度経済成長を背景に強まったと考えられています。しかし、1986年に施行された「男女雇用機会均等法」や、1999年に制定された「男女共同参画社会基本法」等によって、男女が仕事・学習・地域活動を行えるように、家事・育児・介護などの家庭的責任を、男女が協力して分担することが重要とされています。

現在は「父親が働き、母親は専業主婦」という性的役割分担に基づく暮らし方は多数ではなくなり、夫婦共働き世帯も増えていますが、女性は男性よりも非正規雇用が多く、女性の政治参加や職場の管理職への登用が諸外国と比較して進んでいません。2019年に発表された世界経済フォーラムの調査では、日本のジェンダー・ギャップ指数は、世界の中でも下位とされました。社会の政策整備や職場の環境づくりと合わせて、私たち一人一人の意識改革が課題となっています。

このドラマで描かれているように、共働き家庭であっても家事労働の負担が一方に偏っていて、不平等さを感じているケースも少なくありません。家事は、互いの生活空間をメンテナンスしていく行為ですから、明確な役割分担がある場合は別ですが、基本的にはどちらも主体的に関わるもの。「手伝う」というより「共有する」というとらえ方が、意識のズレに気付くヒントになるかもしれません。

私たちは、社会の常識や慣習、世間体などによって、無意識のうちに「○○だからこうあるべき」という考えを持ち、その価値観を相手にも押し付けてしまうことがあります。特に家族同士の場合、同じ価値観でいなければならないという思い込みを持ってしまいがちです。しかし、家族といえども最初から違う個の持ち主であり、育った環境も違います。なかなか理解しがたいところがあっても当たり前なのです。無理やり理解しようなどとは考えず、違っていることを前提に伝え合うことがコミュニケーションギャップの解消には重要です。

「〇〇らしさ」への囚われ

「性的役割分担意識」の根深さは、思い込みによって「自分自身の生き方を自ら縛ってしまう」という状況もあることです。母親だから、父親だから、妻だから・・・そういった周りから期待される一定の役割や振る舞いを意識し、そこに応えようとする必要以上に囚われてしまっている人がいます。例えば「専業主婦であった母と同じように家事をしなければならない」「男だから一家の大黒柱として自分の稼ぎで家族を養っていかないといけない」というように、「社会的位置づけ」によって、女性だけでなく男性の中にもしんどい思いをしている人がいるのです。家庭内でそういった意識や言動が慣行となってしまうと、若い世代にも固定的な役割分担意識が引き継がれてしまうことにもなります。

自分を縛るものを見極め、お互いに言葉にしてみることが、この問題に向き合うための第一歩です。それが相手への想像力を生み、異なる立場に置かれた人同士でも、互いに抱えている悩みや感情を共有するきっかけにできるかもしれません。

【キーワード】

「ジェンダー・ギャップ指数」

2019年12月17日に発表された世界経済フォーラム（WEF: World Economic Forum）による19年の「ジェンダー・ギャップ指数」（the Global Gender Gap Report 2020）では、日本が前年の110位から順位を下げ、153カ国中121位となりました。

持続可能な開発目標（SDGs）は目標5で、性別による差をつけずに機会を与える「ジェンダー平等」を掲げています。差別撤廃はもちろん、育児や家事など無報酬労働への評価、ICTを活用した女性のエンパワーメント（能力の発揮）と多くの目標が並びます。日本の遅れが目立つ目標が「政治、経済、公共分野への女性参画、平等なリーダーシップの機会」です。女性政治家が少ない背景には、性的役割分担意識や、政治が男性のものと考えられてきたため、そもそも女性が候補者になりにくい社会的構造があるとされています。

■ 主な場面とセリフ

以下のやり取りやセリフについて、あなたはどのように考えますか？

【ミサキとサトシの会話】

ミサキ「だいたい息子ひきこもりだよ」

サトシ「なにそれ、関係ないじゃん」

ミサキ「なにが！ カナに何かあったらどうすんの」

× × ×

【ミサキとハナエの会話】

ハナエ「あなたのためとか言いながら……『ひきこもりなんてみっともない』『世間体が悪い』って

自分のためだったんじゃないかって……。あの子自身の辛さ……。傷つけられて、でも社会に出られない自分を責めてしまう……。そんなあの子自身にちっとも向き合ってなかったんじゃないかって……」

ミサキ「……」

× × ×

【ミサキとハナエの会話】

ハナエ「私ね、相談に行ったあと、ひきこもりを責めるようなこと言うのやめたの。『なんで』『どうして』とか『がんばれ』とか。その代わりに『おはよう』『おやすみ』とか『おかず冷蔵庫の中』とか、なんてことないこと話しかけたの」

× × ×

【ミサキのモノローグ】

ミサキ「『ひきこもり』 = 『病氣』でも『弱い人』でも『だらしない人』でも、ましてや『怖い人』でもない。

私は世間のイメージでひとくくりにして、リョウさん自身を見ようともしていなかったんだ……」



Q1. あなた、もしくは身近な人が、「根拠のない噂」で人を判断したり、された経験はありますか。

また、それはどのようなことですか。

Q2. ハナエから外に出るように説得されたとき、リョウはどんな気持ちだったと思いますか。

Q3. 「その人自身と向き合う」ためには、予断や偏見にとらわれず、まず相手を知ることが大切だと言われています。

あなたはそのためのどんなヒントをこのドラマから受け取りましたか。

偏見によって生じる問題とは・・・

私たちは、他人を「職業」「社会的地位」「出身」といったその人が有するなんらかの 카테고리でくくって評価・判断をしてしまうことがあります。そして、実態を知らないにも関わらず、風聞やイメージによって、あるカテゴリーに属する人への誤解や偏見を持ってしまうこともあります。

ドラマの中では、偏見の一例としてひきこもりに悩む親子に対するミサキの思い込みが描かれています。昨今、加害者がひきこもりだったとされる事件の報道などから、「危険な存在」と偏見の目を向けてしまう人がいます。また、「本人が怠けている」「親が甘やかしている」というように当事者に責任があるように決めつけてしまっている人もいます。

ひきこもりの状態にある方やそのご家族は、それぞれ異なる経緯や事情を抱えていますが、多くの場合、生きづらさと孤立の中で苦しみながらひきこもっています。そんな当事者が社会と繋がりを持とうとしたときに、まわりからのそういった偏見や誤解によって、社会と繋がるのがより高いハードルとなってしまっているとしたら、それは私たちの偏見によって生じる大きな課題の一つとは言えないでしょうか。

大切なことは、その人自身と向き合うことです。人との関わりの中で、「個」を見ないでその人物をカテゴリーで捉え、決めつけてしまうことは偏見につながる恐れがあることを十分に認識した上で、理解・判断する必要があるのです。このことはひきこもりに対して以外にも、現在起きている様々な偏見の問題に当てはまることだと思います。

■ 考え方のポイント

家庭内の偏見

偏見や誤解の問題は、親や家族も例外ではありません。一番の理解者として寄り添いたいという気持ちがあったとしても、「本人は今考えている。いずれやる気を出してくれる」、「世間体が悪い」などといった家族の一方的な認識や説得が、本人をかえって追い詰め、苦しめてしまうということもあります。

誤解が生じる一番の理由は、本人と家族との間に「対話」がないことです。ここで言う「対話」とは、相手の立場や性格や考え方を認め、「あなたのことをもっと知りたい」という姿勢を示したコミュニケーションのことです。「対話」の目的は、結論や正解を出すことではなく、価値観を理解し、共有しようと試みることで、安心感や信頼感のある関係を築くこと。どんな人でも、安心して過ごせる場所や、自らの役割を感じられる機会があることが、生きていくための基盤になります。

この「対話」の考え方を、親子間・家族間に限らず、コミュニケーションの取り方について考える際のヒントにしてみてもいいでしょうか。

【キーワード】

「ひきこもり（社会的ひきこもり）」

「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」によると、ひきこもりの定義は「様々な要因の結果として、社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職員を含む就労、家庭外での交遊）を回避し、原則的には6か月以上にわたっておおむね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を示す現象概念」とされています。ひきこもりは社会参加をしない「状態」を指す言葉であって、「病名」や「診断名」ではありません。ひきこもりは、「就職氷河期」といった時代背景、「ハラスメント」や「病気」、「親の介護」をきっかけとした離職など、どの世代の誰にでも起こりえます。近年、ひきこもりの長期化、高齢化とともに、中高年のひきこもり当事者とその高齢の親が社会から孤立し、生活に困窮するいわゆる「8050問題」が社会問題となっています。

《コラム①：共働きの子供はかわいそう？》

人生観や結婚観といった価値観はその人の育った環境や経験によっても異なり、その多様性は本来尊重されるものです。しかし時として私たちは「家族や結婚はこうあるべき」「子育てはこうあるべき」といった考えを、一般論として語ってしまいがちです。そして、そうした「べき」から外れたことにされた人々の中には、自分が悪いことをしているかのように思い込んだり、自らのライフスタイルの選択肢を狭めてしまったり、といった生きづらさを感じている人もいます。

自分のことを自分で決められることもまた人権です。「専業主婦」も「共働き」も選択肢の一つであり、「べき」が前提となつて固定的であってはならないのです。大事なのは当事者がどう感じるかであつて、周囲が安易に「共働きの子供はかわいそう」などと決めつけるべきではないでしょう。

同性愛の人、シングルの人、子供ができない人など、家族や結婚に関してだけでもいろいろな生き方があります。それだけでなく、働き方や趣味のありかたなどについても、価値観は人それぞれです。「一般的に良いものである」という考え方には、注意が必要であることを意識しておきたいものです。



《コラム②：子供の前で夫婦喧嘩は虐待？》

夫婦喧嘩はできればしたくないもの。子供の前であればなおさらです。夫婦喧嘩をしようと思っする人はいないと思うのですが、話し合いのつもりが言い合いになる・・・なんてことはよくあることのようにも思います。実は日本の児童虐待防止法では、「子供が同居する家庭における配偶者やその他の家族への暴力」は心理的外傷を与える虐待であるとされています。暴力には言葉の暴力も含まれます。

軽いイヤミのつもりでも「困ったお母さんだよな」「お父さんみたいにはなっちゃだめ」などと子供も巻き込んで文句や悪口を言ってしまったとき、それを聞いた子供はどんな気持ちになるのでしょうか。

確かなことは、幼少期に見る父母の様子は、子供の性格をつくり上げるうえで大きな要因の一つになっているということです。「子供の前での夫婦喧嘩は虐待になる場合がある」ということは衝撃的ですが、それほど子供にショックを与えてしまうことだという意識は必要なように思います。



■ 主な場面とセリフ

以下のやり取りやセリフについて、あなたはどのように考えますか？

第3章 『話せてよかった』

～家族だからこそ確かめ合う～

【サトシとサトシの姉の会話】

サトシ「え・・・悪いの？ 母さん」

サトシの姉「悪いも何も、認知症よ。初期だっていったって、一人暮らしは無理かもね」

× × ×

【ミサキとサトシの会話】

ミサキ「後でちゃんと話そう」

サトシ「ミサキは心配しなくていいから。俺と姉ちゃんて解決するから」

× × ×

【ミサキとサトシの会話】

ミサキ「一人で抱えてたら負担だよね、さっきのサトシみたいに。でも二人でだったらなんとか

できるんじゃないかな。ちゃんと話して、お互いの状況とか考えとか、確かめ合っていけば」

サトシ「確かめ合う・・・か・・・」

× × ×

【ミサキとサトシの会話】

サトシ「認知症だってなんだって、母さんは母さんだ。母さんは今、どう思ってるんだろうな・・・」

ミサキ「病気のこと、今までの暮らしが変わってしまうかもしれないことも、すごく不安だと思う。

まず、話しないとね、お義母さんと」

サトシ「そうだな。話しないとな」



Q1. 母が認知症であることを突然知らされたとき、サトシは何を考えたと思いますか。

また、今までとは違う義母の様子に気付いたとき、ミサキは何を考えたと思いますか。

Q2. 家族や親しい間柄だからこそ言いにくいことには、どんなものがあるでしょうか。

Q3. もしあなたがサトシだったら、母の認知症についてミサキと共有した後、どのように行動しますか。

身近な人が認知症になったとき・・・

親やパートナーがもし認知症になったら・・・と考えてみたことはあるでしょうか。日本では、人生100年時代と言われる「超高齢化社会」を迎え、2025年には65歳以上の高齢者の5人に1人は認知症になるという推計もあります。認知症の最大の原因は加齢とされているので、認知症は誰にでも起こりえます。そしていつ誰がなるのかわかりません。最初は小さな支障でも、すぐに一人で生活できなくなるほど状態が悪化することもあります。

家族による認知症の介護は非常に難しい面があります。何故なら認知症じゃないときを知っているからです。誰しも特に親に対しての認識は、子供の頃からの「〇〇なお父さん」「〇〇なお母さん」というものですが、それがいざ認知症となると、その認識そのものが崩壊し、過去の認識と認知症となった現状に対してギャップが生じ、なかなか受け入れられない現実を突きつけられます。家族だからこそ「何でこんな事も出来なくなったのか?」「何で意味不明な言動を取っているのか?」というように負の感情が生じやすく、溜まりやすいのです。認知症に対しての無知さも重なると、そこから虐待へ走ってしまう傾向があるとされています。

大切なことは、自分自身がまず「認知症」や「介護」についての知識を身に付けることです。知識や対応方法を知ることが、負の感情を生じにくくさせて、生じたとしても、溜まる前に解消しやすくなります。

本人の意思を尊重する

認知症でも、その人であることに変わりはありません。認知症の人にもちゃんと悩みや葛藤があって、それぞれの行動にはちゃんとした理由があります。そして、認知症は、「本人が一番不安」なのです。例えば何か物をどこかに置き忘れてしまった時。本人にしてみたら、今まであったはずの物が突然消えたと感じています。しかも全く身に覚えのないところから見つかります。しかし、家族には取り合ってもらえない。こんなに不安なことはあるでしょうか。まずは言っていることを受け止めてあげましょう。

また、本人達にとって居心地の良い環境にすることで、徘徊や暴力は減るといっても言われています。そんな環境をつくるためには、対話によって本人の意思を聞き、尊重することが一番です。必要に迫られてから動くのではなく、普段から意識的に会話をして、お互いの気持ちを確かめ合う習慣を作っておきたいものです。

介護のカタチは人それぞれです。親を自ら介護している人もいれば、直接関わらないスタンスの人もいますが、正解はありません。いろいろな生き方や選択肢があって良いのです。重要なことは自分の仕事や生活を犠牲にして介護を背負い込むのではなく、自分の人生も大切にしながら、いかに介護をするか。介護する側にも人権があります。自分がイライラしていると介護される側も敏感になるものです。自分がまず心に余裕を持ち、生き生きと楽しくする。それが自分と介護される人も救うことになるのではないのでしょうか。

■ 考え方のポイント

第3章 『話せてよかった』

～家族だからこそ確かめ合う～

家族だからこそ確かめ合う

どれだけ長い時間一緒にいる相手でも、以心伝心とはいかないものです。大切なのは、相手を「個」として認め、きちんと自分の想いを自分の言葉で伝え合い、互いの立場や考えを「確かめ合う」こと。このことは、ドラマの第1章～第3章で描かれているすべてのシチュエーションに共通していて、あらゆる人間関係においても重要な考え方です。その実践のためには、まず身近な存在との向き合い方からふりかえってみることが入り口になります。

「家族とはいえ、みんな違う人間

近い存在だから忘れがちだけど、それぞれにそれぞれの想いがある

会話があれば、考えの違いを認識できるし

違っていることがわかってれば、伝え方も変わってくる

そして、今日わかり合ったとしても

明日も同じとは限らないから

毎日毎日確かめ合っていたらいいよね・・・お互いに」

ミサキとサトシは、このように気持ちを新たにしました。

忙しい毎日の中で、相手のことを「わかったつもり」になっていて、でも実は「よく知らない」「わかっていなかった」ということもおそらくあるでしょう。「人権」の考え方をヒントに、身近な人との関係やコミュニケーションについて、ちょっと立ち止まって考えてみてはいかがでしょうか。



Q. ミサキとサトシは、パートナーのどんなところに不満を抱いていると思いますか。
それぞれの立場になって考えてみてください。

A. _____

Q. 「家のことは妻がやる」。このような性的役割分担意識が表れた言動には、他にどのようなものがあるでしょうか。

A. _____

Q. 相手との意識のズレを感じるとき、自分も相手も尊重しながらそれを埋めるためには、
どのようなコミュニケーションがあればよいと考えますか。

A. _____

Q. _____

A. _____

Q. あなた、もしくは身近な人が、「根拠のない噂」で人を判断したり、された経験はありますか。また、それはどのようなことですか。

A. _____

Q. ハナエから外に出るように説得されたとき、リョウはどんな気持ちだったと思いますか。

A. _____

Q. 「その人自身と向き合う」ためには、予断や偏見にとらわれず、まず相手を知ることが大切だと言われています。あなたはそのためどのようなヒントをこのドラマから受け取りましたか。

A. _____

Q. _____

A. _____

Q. 母が認知症であることを突然知らされたとき、サトシは何を考えたと思いますか。
また、今までとは違う義母の様子に気付いたとき、ミサキは何を考えたと思いますか。

A. _____

Q. 家族や親しい間柄だからこそ言いにくいことには、どんなものがあるでしょうか。

A. _____

Q. もしあなたがサトシだったら、母の認知症についてミサキと共有した後、どのように行動しますか。

A. _____

Q. _____

A. _____

家庭からふりかえる人権

話せてよかった

ワークシート